月刊ウィーン GEKKAN-WIEN　Dezember 2015　Nr. 318　gegründet 1989　平成元年創刊

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2015年12月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 27 年目
創刊 1989 年　Nr. 318

Gustav Klimt　Eugenia (Mäda) Primavesi　1913/14　Öl auf Leinwand　140 x 85 cm　© Toyota Municipal Museum of Art
ベルヴェデーレ下宮 Unteres Belvedere　企画展「クリムト / シーレ / ココシュカ と女性たち」にて 2016 年 2 月 28 日まで展示

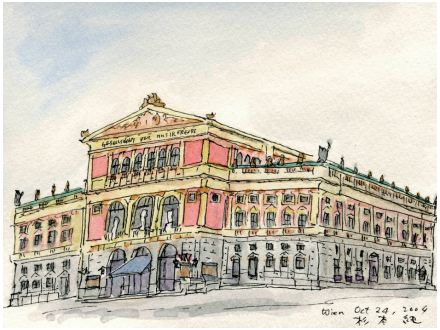
杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 51

「シビアアクシデントの影響軽減と研究協力に関する福島事故後の課題」と題する国際会議が十一月九日～十一日にかけて、韓国原子力研究所と韓国原子力安全技術院の主催、韓国原子力学会の後援により韓国のテジョンで開催された。会議の目的は、シビアアクシデントの影響軽減に関する東アジアにおける研究協力ネットワークの強化、東アジアにおける原子炉安全の強化、原子力安全分野における人材と専門性の育成、日中韓欧米間の研究協力ネットワークの展開である。東アジアを中心に八ヶ国から百一四名の参加があり、五四件の論文発表があった。我が国からは、産業界、研究所、大学から十一名の参加があり、八件の発表があった。今回は九七名の参加があった地元韓国を中心に若手の参加が多いことが特徴的であった。

筆者は九件ある招待講演の一つとして、開会一番目に「日本におけるシビアアクシデント研究の現状と関連する日中韓の研究協力の展望」と題する講演を行った。残念ながら質疑応答の時間が取れなかったが、講演終了後、個人的に中国の学生から詳細な質問があった。また、二日目最後の「福島事故後のシビアアクシデント影響軽減と地域協力に関する課題」と題するパネル討論でもパネリストを務め、想定外の事象に柔軟に対処するレジリエンスを高めることが重要であることを強調した。三日目は韓国原子力研究所を見学したが、すでに水素関連の新しい実験装置が完成していた。また、開会直後に招待講演した米国原子力規制委員会のバスト氏と約十五年振りに会うとともに、韓国在住のかつての原子力機構の研究室仲間三名に会うなど、旧交を温めることができ、個人的にも大変有意義な時間を過ごせた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関係の深い指揮者の佐渡裕（さどゆたか）さんについて述べてみたい。日曜朝の人気番組「題名のない音楽会」の司会を二〇〇八年から七年半務めた佐渡さんは、今年九月より百八年の歴史を持つトーンキュンストラー管弦楽団音楽監督に就任し、十月二日に楽友協会黄金の間で就任後初の定期演奏会を開催した。パリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団など、欧州の一流オーケストラへの客演を毎年多数重ね、二〇〇一年にバイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィル管弦楽団、二〇〇三年にロンドン交響楽団にもデビューを果たすなど、欧州での活躍は目覚ましく、絶大な人気を誇っている。

佐渡さんは京都市右京区太秦生まれの京都育ち、京都市立堀川高等学校音楽課程（現京都堀川音楽高等学校）を経て京都市立芸術大学音楽学部フルート科を卒業している。大学在学中に指揮活動を開始し、京都光華中学校・高等学校のブラスバンドをはじめ関西二期会副指揮者などを経てタングルウッド音楽祭オーディションへの参加許可を得る。同音楽祭で小澤征爾とレナード・バーンスタインに師事した。二人のスポンサーの協力を得てウィーンに渡り、バーンスタインのアシスタントを務め、一九八九年にブザンソン国際指揮者コンクールで優勝し指揮者としてプロデビューした。躍動感溢れる指揮振りが人気で、我が国で最も脂が乗っている今後が楽しみな指揮者と言えよう。



余談であるが、筆者は佐渡さんの音楽を直接聴いたことはない。しかし、ウィーンと京都の両市に関係のある者同士として、勝手に親近感を覚えている。佐渡さんを紹介できた幸運に感謝しつつ、佐渡さんのこれからのますますのご活躍を願って、楽友協会を描いたスケッチを掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■